

ものとお話することのおもしろさ
— 学習観の転換 —

里井 洋一

Appreciate interacting with things
Paradime shift of Learning

Yoichi SATOI

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第17号別刷

2024年3月15日

Reprinted from the
Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.17
March, 2024

ものとお話することのおもしろさ — 学習観の転換 —

里井 洋一¹⁾

Appreciate interacting with things
Paradime shift of Learning

Yoichi SATOI¹⁾

1. はじめに

近代国家が生まれることによって、国民をつくる近代学校が誕生した。この近代学校を支える世界観が客観（実証）主義である。客観主義は科学が生み出した客観的な事実・原理・理論が存在し、それを身につけるためには基礎から段階を追って学ぶことが有効であるという行動主義心理学を背景にもつ。このような考えは、基礎習得、反復練習が「勉強」であり、それに耐える力が将来役に立ち幸せに繋がるという信念を生みだしてきた。この世界観は、近代を支えた会社や工場において有効に働いた¹⁾。しかし、1990年代、人類学研究と認知心理学が結びついて研究されることによって²⁾、人は自らに必要なことを自発的に構築していくという構成主義³⁾が重視されるようになる。そのキーワードは「知の営み」の伝承である⁴⁾。やがて、この世界観は「主体的で対話的で深い学び」という2017年指導要領に反映する。

一方、2023年4月博物館法が改正された。改正のよりどころは、2021年12月の「文化審議会答申：博物館法制度の今後の在り方について」である。同答申はこれからの博物館に求められる役割と機能を次のように示した。

- 1 「守り、受け継ぐ」資料の収集・保管と文化の継承
- 2 「わかち合う」資料の展示、情報の発信と文化の共有
- 3 「はぐくむ」多世代への学びの提供
- 4 「つなぐ、むきあう」社会や地域の課題への対応
- 5 「いとなむ」専門人材の確保、持続可能な活動と経営の改善向上

従来の博物館の役割は、1と2が中心であった。3～5が改正のポイントということになる。本論では、「守り、受け継ぐ」「わかち合う」「はぐくむ」「つなぐ、むきあう」「いとなむ」に注目する。これらのワードは構成主義的な世界観を表している。博物館が人々にとって必要な学びの場になることを求めていると考えられる。

2. 構成主義モデル「変だなワークショップ」

学校による博物館見学を事例に考えてみたい。学校は先にも述べたように客観主義のもとに誕生した。それゆえに、見学にあたって、次のような要件が共通理解項目となってきた。

- 1, せっかく、博物館に行くのだから全部みせたい。
- 2, 見たかどうか、確認したいのでワークシートに記入させたい。ワークシートは判定しやすいように穴埋め形式が一番よい。可能ならそのワークシートを博物館で作ってほしい。
- 3, 見学できる時間は限られているので、おしゃべりをせずワークシート記入に集中させたい。また、効率的に見学できるルートを博物館が設定して欲しい。
- 4, こどもは、博物館のモノと対話せず、解説を筆写することになる。そのように指導しても、はみ出で、モノと対話する子どもが現れる。すでに持っている知識でモノをみて触発され、解説で納得したり、さらに疑問をもったりする子どもがいる。こういう子どもは肯定されてきた。

ところが、思いついたことを隣の子どもとおしゃ

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

¹⁾ 佐藤学『教育方法学』岩波書店、1996年。

²⁾ ジーンレイブ『状況に埋め込まれた学習』1993年、ジーンレイブ『日常生活の認知行動』1995年。

³⁾ KJガーゲン『社会構成主義の理論と実践』2004年。

⁴⁾ 佐伯胖『『社会科』授業のむつかしさと楽しさ』（『授業4社会』1992年。

べりする。その場を離れず飽きず物と対話する子どももいる。そのような子どもは、客観主義のもとでは注意される対象となってきた。

5、ワークシートに記入されたことは、教師もしくは学芸員が正解かどうかの判定者となる。

このような形での見学は、子どもたちを博物館の「友だち」にできるのだろうか。学校からの子どもの逃避（不登校）が問題になっている。まして、学校と異なり行く義務のない博物館は、逃避したい対象となっていくのではないだろうか。

そこで、学校の博物館見学の構成主義モデル「変だなワークショップ」を提示したい。

1、子どもに白紙の紙を一枚与え、博物館のものをみて、「あなたが変だな」と思うものを一つ選んで書きなさい。字で書いてもいいし、絵にしてもいいし、写真をとれるなら、それでもいいと指示を出す。

2、あらかじめ設定していたグループ（3人以上、時間がなければ2人でもいい。見学時間によってきめる）が集まり、それぞれが、変だなと思うところへ連れて行き、変だなという理由を友だちに語る。ここで対話が生まれると理想的なのだが、たいていの場合、うまくいかない。

3、他者と意見交換するのが嫌だ、どうせ答えが決まっているのに、正解をかたることはめんどくさい、間違っているかもしれないことを語ることは恥をかくので、言いたくない。というような客観主義の中で醸成されてきた世界が邪魔をすることになる。ここが、正念場である。

4、ここで、仮説を述べることの面白さを知っている研究者（学芸員・教員）の登場となる。モノと対話し、仮説を提示し、その仮説がたとえ間違っていたとしても様々な対話がなされてくることの喜びを具体的に語る時間が事前指導でなされなくてはならない。人類史における様々な試行錯誤が文化を生み出した知見がその背後にある。

5、その上で、友だちが語ったことに対して、思ったこと、考えたこと、聞いてみたいこと、を別紙白紙に書く時間を設定したい。字で書けない子どもには絵でもいいとしたい。書いたものをグループの中で回し読みすることによって、他者による評価が子どものIdentityを築くことに繋がる。また、書け

なかった子どもも他者の記述を読むことによって、自分の中で不確かだったものを次第に認識し、表現することができるようになる（小学校の実践において実証されている）。

6、回し読みを終えた後、不思議なのだが自然と相互の対話が生まれることが多い。モノとの対話は、その道の専門家でも正解がないものが多い。しかし、そこにモノがあるゆえに、その子どもの既存の知識・経験とリンクした推論が可能である。モノと対話することが面白い、他者と意見を交わし多様な考えがあることが面白い。自分の考えを他者が聞いてくれることが嬉しい。

7、博物館の展示物を見て、その中から子どもは一つ選び、他者との間でいくつか賞味しあう。それは全てをみることではないので、効率的ではないかもしれない。しかし学校に帰り、その思考のプロセスをクラスや学年全体で、具体的に分かちあう中で博物館の全体像が見えてくる。その上で、Aさんが変だと言ったことは何だろう、Bさんが変だ、疑問だといったことは何に起因しているのか。もう一回博物館に行ってみたい。というように博物館と子どもは「友だち」になれるのではないかと私は考えている。

3. 沖縄県小学校社会科研究「変だなワークショップ」実践

2023年8月9日、沖縄県小学校社会科研究会の先生方と、沖縄県立博物館常設展で「変だなワークショップ」を行った。以下、先生方が何を「変だな」と考えたのか、私が配置されたグループの中でどういった交流が行われたのか、「変だな」が提起したことに触発され私自身の内言（心のつぶやき）を中心に変化・深化したことを記していく。文章中、先生方の発言や議論と記した部分がある（「」で表示）。それ以外は私の内言であることをあらかじめ記しておく。ワークショップでモノを指しながらの指示語（アレ・コレ・指さし）など、明確でなかったものは、後に調べた名称に置き換えた。

（ア）宮古島諸島に瓦窯しかないのは変だ

博物館常設展に、沖縄県における陶器窯と瓦窯の分布図がある。「沖縄島や八重山島には陶器窯と瓦窯が両方あるのに、宮古島には瓦窯しかないのは変

だ。」と言って、「沖縄の窯跡」と記されたパネルの前にA先生は案内してくれた。

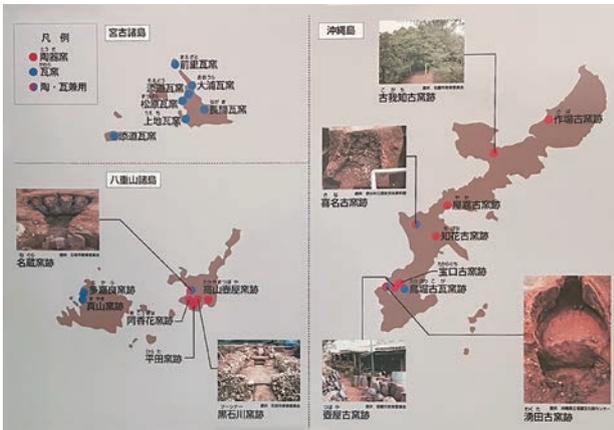


写真1 「沖縄の窯跡」パネル

パネルには下記のように記されている。

沖縄県内では窯跡が30か所以上で確認されています。文献資料によると沖縄では16世紀中頃から瓦の生産が始まり、17世紀頃から陶器の生産が始まったとされています。

沖縄で最も古い窯跡は、那覇市にある湧田窯跡です。17世紀前半頃に始まった湧田窯では、まず瓦や瓦質土器が作られました。1682年に湧田・知花・宝口窯の3つが壺屋窯に統合されると、窯業の中心は壺屋に移りました。

パネルには、写真1にみるように凡例として、「赤丸—陶器窯、青丸—瓦窯、赤青丸—陶・瓦兼用」とある。

沖縄島の陶器窯跡としては、作場（大宜味村謝名堂）、古我知、屋嘉、知花、宝口、壺屋があげられ、瓦窯跡としては鳥堀、真玉橋、陶・瓦兼用窯跡として喜名、湧田が記されている。沖縄の窯跡は10カ所ということになる。

八重山の陶器窯跡としては、高山壺屋、黒石川、平田、阿香花、瓦窯としては、西表島にある真山、多嘉良、陶・瓦兼用窯跡として、名蔵が記されている。八重山島の窯跡は7カ所ということになる。

宮古島では、瓦窯として、池間島の前里、宮古島

の大浦、添道、長間、松原、上地、そして多良間島添道の七カ所があげられている。



写真1-2 宮古島諸島

パネルでは沖縄県全体で24カ所となり、展示解説で述べられている30カ所以上とは符号していない。

パネルの前で、A先生は、「宮古島諸島には瓦窯しかないのは変だ。」とのべ、変だという理由を次のように言う。「沖縄はともかくとして、八重山でも陶器も瓦も窯があるのに、宮古諸島には瓦しかないというのは納得できない。」

先生たちは、「陶器の窯が宮古島にないのは、陶器が沖縄や八重山から、商売用に運ばれてきているのか。」「それとも土器を利用していたのか。」

私は、1974年の青山学院大学「砂川元島遺跡」発掘調査に参加した経験から、発掘の中で、中国青磁と、瓦が出てきたことを述べた。そして、青磁からすると時代は14・15世紀の瓦ということになるのではないかと話した。なぜ、砂川元島に瓦窯がないのか私は疑問に思った。

議論はさらに続いた。

「こんなにたくさん瓦窯が発見されているが、前近代、瓦葺の建物はあったのか？」という問いが発せられ、それに対して、「宮古島の蔵元は瓦葺であったかもしれないが、そんなに大きな需要があったとは考えにくい。」むしろ、「生活に欠かせない陶器の需要の方が大きかったのではないか。」「では、この瓦窯は近代になってからの窯跡なのか。それとも瓦を移出していたのだろうか。」

青磁が14・15世紀の遺跡から出てくるということは、近世でも中国青磁が生活用具として使われて

いたのか。それとも、先ほど出てきたように、陶器を宮古島以外から買っていたのか。それとも土器を使っていたのか。解説から、窯跡は16世紀以降の話だが、近代の窯跡も含まれているのか。

「宮古島諸島には瓦窯しかないのは変だ。」という議論は、14・5世紀から近代に至る沖縄の土器・磁器・陶器の生産と流通に関する興味に発展していく。そして、パネル展示が示した窯跡名があるがゆえに、調べるための手がかりを得ることもできる。

上記の論点を踏まえて、先行研究をもとに考えてみることにする。

まずは、パネルの根拠資料に関して考えてみる。宮古島の瓦窯7箇所は『生産遺跡分布調査1』[第4表、宮古島の生産遺跡一覧]⁵の中にある瓦窯跡7ヶ所と符合している。

ただし、沖縄島ではパネル以外に陶器窯跡として内喜納、瓦窯として、奥の瓦屋、伝山田窯跡、内間窯、山川瓦窯跡、八重山島では陶器窯跡として宮良、ウイヌズ（平得）が挙げられ、これらを含めると31ヶ所の窯跡となり、パネルの解説文章「30ヶ所以上」という説明と符号する。パネルは1995年段階の研究を反映していると見ることができる。

次に、宮古島の瓦窯について考えてみる。上原静は「宮古諸島における遺跡出土の屋瓦」⁶の中で次のように述べている。

稲村賢譜がグスク時代の上比屋山遺跡名と記した紙袋に入った高麗瓦を現宮古島博物館に寄贈している。上原はこれ以外に宮古で高麗瓦の出土がないことから、疑問を呈している。また、同じくグスク時代を含む14～17世紀に至る砂川元島遺跡の表土から瓦が出土する。しかし、素地は砂川遺跡出土の土器2類に近く、宮古島産明朝系瓦と上原は言う。私が1974年の青山学院調査団の発掘の時に見た瓦で、磁器と同じグスク時代のものと思っていたが、近世のモノだと上原は考えている。

したがって、グスク時代には瓦はないという前提で上原は下記のような時期区分を行っている。

I期（17世紀前半～17世紀末まで）は灰色系瓦の時期である。那覇から直接移送されたものと思われる1611年建立の祥雲寺の屋根瓦もこの瓦で築かれたものと考えている。

II期（18世紀～19後半）は酸化焼成炎による明朝系赤色瓦を宮古島自ら生産する時期である。

III期（19末～大戦前）は日本本土の近代瓦の導入期とする。当大和瓦の使用と、明朝系造瓦技術で大和瓦を模した島大和瓦が生産される。

また、上原は『生産遺跡分布調査1』にある7つの瓦窯跡の内、松原、大浦、添道、を戦前の操業、池間島の前里を大正時代の操業と4つの窯を近代の生産窯であることを暗示している。残りの3つ長間、上地、そして多良間島添道に関しては言及していない。では、上原が示した宮古産瓦生産がどう位置づけられるのか文献から考えてみる。「球陽」1682年の記事によると、火事で宮古島蔵元の三つ蔵が茅葺きであったため焼失し、1685年瓦葺きに建て替えられている⁷。稲村賢敷はこの時にはまだ瓦は宮古で生産されず、1740年、柚山下知役をしていた宮金氏寛富が大野山に造林するとともに、大野山で瓦を焼かせたのが宮古製瓦の起源であろうと述べている⁸。上原は大野山林地区には「瓦原」という畑名が存在し、湧水と粘土、薪があり窯跡の存在が予想されるとしている⁹。

また、上原は瓦の出土場所は、近世の蔵元・村番所・御嶽などの権力拠点と重なるという¹⁰。

1767年「与世山親方宮古島規模帳」によると、村番所・苧積屋は御用布製作場所として肝要なところなのでなるべく瓦で作るようにと命じている¹¹。一方、1873年「富川親方宮古島規模帳」によると、頭以下役人・百姓に至るまで瓦葺・雨タリ瓦の使用を「召留」としている¹²。佐渡山政子は、この禁止事項から「当時すでに瓦葺があったこと」が推察できるとい¹³。

以上のことから、近世宮古島において瓦使用は蔵元・苧積屋などの限定された場所であることがわか

⁵ 「沖縄県教育委員会『生産遺跡分布調査1』1995年、〈沖縄県文化財調査報告書119〉」56ページ。

⁶ 『平良市総合博物館紀要 第10号』12ページ、2005年。

⁷ 『角川「球陽」読み下し編』533番、220ページ。

⁸ 稲村賢敷『宮古島庶民史』331ページ、1972年。

⁹ 『平良市総合博物館紀要 第10号』14ページ。

¹⁰ 『平良市総合博物館紀要 第10号』10ページ。

¹¹ 『平良市史第三巻 資料編1 前近代』617ページ、1981年。

¹² 『沖縄県史料首里王府仕置2』388ページ。

¹³ 『宮古島市史第一巻 通史編』171ページ。

る。また、上原は『生産遺跡分布調査1』にある7つの瓦窯跡の内4つは近代以降、3つについては言及せず、近世、大野山での瓦生産窯発見の可能性を語るにとどめている。なお、八重山西表島の二つの瓦窯も近代のものである¹⁴。

また、宮古島に陶器生産窯がないという問題に関しては、例えば「尻並（しなん）遺跡」調査報告書によると、出土した陶器は本土産（肥前・京系・薩摩系等）・沖縄産上焼・荒焼、が記され、宮古島産は何も記されていない¹⁵。

この問題に関して、上原は「宮古諸島の瓦生産は八重山諸島に比すると約30年遅く、炆器質の陶器類も生産されるには至ってない。この背景には生産地（沖縄本島）が近くにあり、使用場所が極めて限定的であったこと、さらに燃料や労働力の安定的確保の困難さがあったと推定される。」としている。

陶器窯がないのは、沖縄という近くの生産地から移入でき、燃料を生み出す山林が宮古島になかったことを示唆していると考えられることができよう。

「宮古島諸島には瓦窯しかないのは変だ。」という議論は、パネル「沖縄の窯跡」が近世の瓦窯分布というイメージで書かれているが、瓦窯跡7ヶ所の内4ヶ所は近代のもので、3ヶ所は時代が確定されていない。窯跡が近世においてはほとんど無い地域であるのではないかという像が見えてきたと言えよう。

(イ) 尚円王ゆかりの御屋敷が茅葺きなのは変だ

沖縄県小学校社会科研究会の先生方とのワークショップを行った日は『重要文化財指定記念 銘蒨家文書と琉球国王朱印状』展（2023年8月4日～9月10日）の最中であった。私は銘蒨家文書4点の内、「諸見御屋敷并御躰所潮平御川の図」を見て、「尚円王ゆかりの御屋敷が茅葺きなのは変だ」と考え、一緒にグループの先生に集まってもらった。

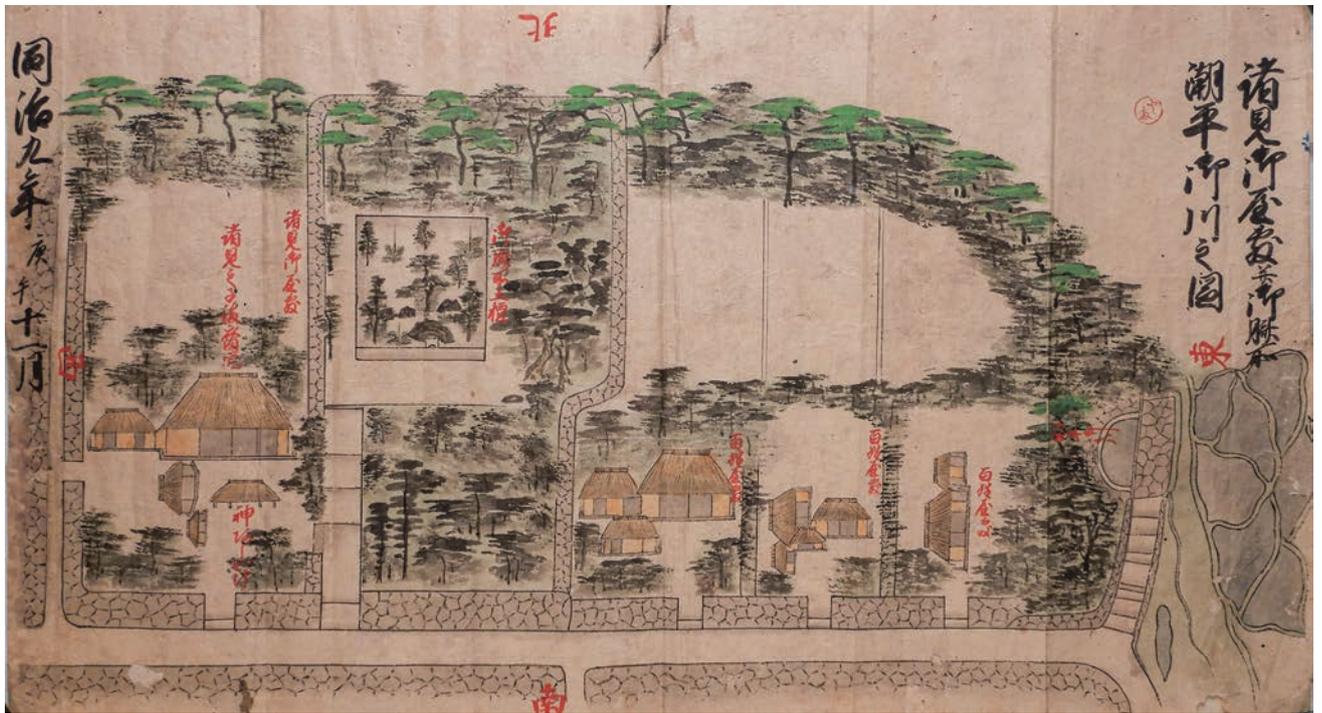


写真2 諸見御屋敷并御躰所潮平御川の図

¹⁴ 『生産遺跡分布調査1』73ページ。

¹⁵ 沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書15：尻並遺跡』33～60ページ、2003年。

解説には次のように記されていた。

現在の伊是名村諸見の一部が描かれた図です。西側に「諸見御屋敷」(石垣の内側に「諸見之子後裔宅」「神あしあげ」)、その北東側に金丸(尚円王)のへその緒を埋めた「御臍所土壇」、その南東側に隣接して3軒の「百姓屋敷」、さらに東側に金丸の産湯(うぶゆ)をつかったとされる井戸「潮平御川」と朱書きされています。諸見御屋敷やみほ所には石垣がめぐらされ、後方には松等の防護林で囲まれている様子が描かれています。伊是名島・銘苅家に伝わった古文書には、風水師(与儀通事親雲上)によって、伊是名玉御殿から北側を眺めた風景を描いた絵図があり、風水を診断するための作画の意図が指摘されています。どちらも伊是名玉御殿において首里風の清明祭祀が開始された1870年に作成されていること等から、王府によって派遣された風水師との関連が想定されています。

朱書きの部分が「諸見御屋敷」「諸見之子後裔宅」「神あしあげ」、「御臍所土壇」、3軒の「百姓屋敷」、「潮平御川」を確認し、「諸見御屋敷」という尚円王ゆかりの御屋敷が「百姓屋敷」と同じ茅葺であることが変ではないのかと問題提起した。

先ほどの「宮古島諸島には瓦窯しかないのは変だ。と関連するね。」「この図には瓦屋がないね。」「百姓屋敷が茅葺きというのは納得できるけど、御屋敷と称されているのに、瓦葺きではないのはどうしてだろうね。」というようなことを議論した。

さらに観察してみると、この絵図の南西側は石垣で北東側は森林で囲まれている。百姓屋敷を含んで一体のものと意識されていることがわかる。また、「諸見御屋敷」は「御臍所土壇」に至る道と「神あしあげ」を経て繋がっている。他の百姓屋敷とは異

なる機能があるのではないかと考えた。

近世、百姓の家を瓦葺きにできない規定を探してみた。1737年、「大御支配方へ申渡條々」に規定された屋敷の制限の中に、首里士族や那覇在住の人々は瓦葺きを許されたが、平民は瓦葺きを禁じられたとあるという¹⁶。平民瓦葺き禁止の原文を下記の「田地奉行規模帳」の条項から引用する¹⁷。

一、田舎中住居家身家廂共、四間三間之家、台所三間二間に不過様、且又檜木いく木に而新家作修補等相用得させ間敷、尤道之島木に而も紛敷有之、杣山締方之故障罷成事候間、是又差留候事。

一、番所并に模合貯蔵之外、瓦家作調候儀堅可召留事。

附、小禄間切儀間村麻氏又吉筑登之居宅、真和志間切天久村に有之候小禄親方元祖祭祀所、豊屋村南風原間切方切請地之内に有之候御茶屋御番人居宅、瓦葺御免に而候。

田舎中、すなわち首里那覇以外に住む人々を指している。4間(7.2m)3間(5.4m)四方、台所3間(5.4m)2間(3.6m)四方の大きさで、硬い檜の木やいく木、道の島(奄美諸島)の木であっても使ってはならないとしている。

また、間切の番所や貯蔵以外に瓦屋を作ってはいけなし、例外として、儀間村麻氏、天久村小禄親方元祖祭祀所、御茶屋御番人居宅をあげている。

では、尚円王に関わる聖地の建物は茅葺なのか瓦葺きなのかをみてみることにする。

『球陽』1687年の条項に、尚真王が一瓦屋を伊是名島に造り、その中に一屋を作って板で蓋をして、厨子を安置し祖先を祭ってきたが、時と共に壊れたので、石で「重修」したとある(伊是名玉御殿)。すなわち16世紀、尚真は父尚円の祖先を祭るための建物に瓦を使ったという¹⁸。

ついで、尚円が伊是名島を逃れて、国頭間切宜名真に逃れてくるが、1781年『球陽』は、その跡地はあるが祭祀は行なわれていないことを馬承基国頭按司正方は問題にし、上奏した。そこで首里王府は宜名真御殿を作り、村民一人を「看守」として夫役を免じて、赤八巻の爵位を与え、王も宜名真御殿を拝謁するようになったと記している¹⁹。

¹⁶ 真境名安興『沖縄一千年史』300ページ、1923年。

¹⁷ 近世地方経済史料 第九巻、66～67ページ。

¹⁸ 『角川「球陽」読み下し編』543番、222ページ。

¹⁹ 『角川「球陽」読み下し編』1352番、394ページ。

ここで注目したい点は、尚円が逃れてきた国頭間切宜名真が聖地となり宜名真御殿と称され瓦葺きの建物となっている点である。また、その番人に位が下賜されたことにも注目しておきたい。

その後、尚円は尚泰久王につかえ西原間切内間の領主となる。1689年『球陽』は、尚円が住んだ屋敷に関して次のように記している。1666年尚象賢（羽地王子朝秀）が摂政になった時、内間御殿が創建され、1689年瓦屋に改築され、村人から「看守」を選び、赤八巻の爵位と田地が与えられたという²⁰。

以上見てきたように、尚円の履歴に関わる聖地は宜名真御殿・内間御殿は瓦屋で葺かれている。では、諸見御屋敷をどう位置付ければいいのか考えてみたい。

内間御殿之守を代々勤めてきた中山家文書に「御番人江申渡書付」という1798年の史料がある²¹。宜名真御殿番人、みほそ所番人、内間御殿守、三者は年齢関係なく赤八巻が下賜され、その上の位はサバクリと同様に年齢に従って与えられる役職であり、位を拝領する時には御近習座で玉貫を拝領し吸い物を頂戴する。つまり百姓とは異なる身分である。と記されている。

すなわち、諸見御屋敷の住人は「みほそ所」の番人であり、特別の身分であることがわかる。『琉球国由来記卷十六』『金丸王加那志御屋敷』に、「みほそ所」について、記された後、「神アシヤゲ耆 諸見ノヒヤ家アリ、右家火神ニ、公儀御立願、並島中御祭禮所ニテ、往古ヨリ、諸見ノヒヤ子孫、代々居住、奉崇也」とある。「みほそ所」の番人は、諸見ノヒヤの子孫が代々務めていることがわかる。諸見ノヒヤは「諸見御屋敷并御躰所潮平御川の図」にみる「諸見之子」と考えることができよう。諸見で行われる年中行事は、ここから出発する慣例となっているという²²。

以上見てきたように、「諸見御屋敷」は番人の屋敷であって、尚円ゆかりの聖地ではない。番人は特別な待遇は与えられているが、田舎に住む人々と同様茅葺きであったのである。なお、伊是名島の銘苅

家は1744年家譜を取得し士族となる²³が、瓦葺きに改築されるのは、1904・5年頃である²⁴。近世、宮古や八重山の士族の屋敷も茅葺きであったことと呼応している。

(ウ) まーらんはサバニと異なり豪華だ

B先生は、馬艦船の模型が展示しているところに、連れて行き、「まーらんはサバニと異なり豪華だ」と語ってくれた。

「変だな探しルール」と異なる。確かに、舵、船室、白黒の目もある。そこで、私は、違う点、同じ点はないのだろうか。と言い、実際に民俗展示室に移動してみた。ルールとは異なるが、B先生は比較して考えるという視点を与えてくれた。



写真3-1 マーラン帆



写真3-2 サバニ帆

²⁰ 『角川「球陽」読み下し編』553番、224ページ。

²¹ 『西原町史第二巻 資料編 西原の文献資料』259～262ページ。

²² 『伊是名村史 下巻 島の民俗と生活』287ページ。

²³ 『伊是名村史 中巻 島の古文書』109ページ。

²⁴ 『伊是名村史 下巻 島の民俗と生活』44ページ。

「帆が一つ一緒だ。」帆の素材はマーランが竹を編んでいるようにみえたけど、サバニは布が張られている。



写真4-1 サバニ カーラ、継ぎ目がわかる



写真4-2 マーラン カーラ

「底の部分の材木、いわゆる竜骨(カーラ)があるのは一緒なのかな。」「マーランは一本の木でできているように見える。」「サバニもそこに、木が張り付けられている。マーランと同じなのかな。」

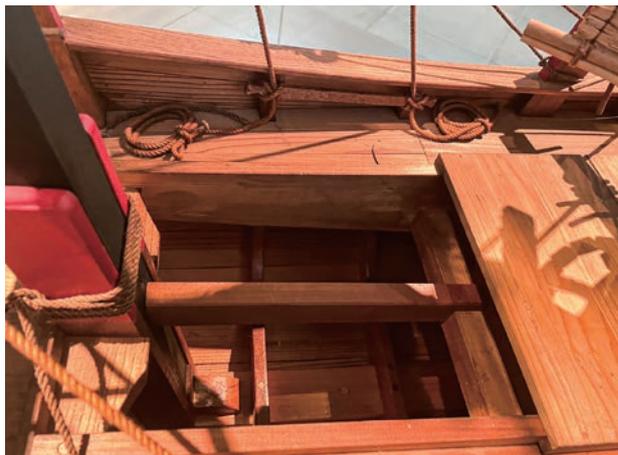


写真5-1 マーラン張り棒



写真5-2 サバニの張り棒

「張り棒(ハイポー)があるのも同じだ。」肋骨のように舟を支えているのかな。



写真6-1 サバニ先端



写真6-2 丸木舟先端

さらに、サバニ観察の中で疑問が出てきた。「サバニの先頭が尖っていないのは変だ。舟が速く走るためには尖っていた方がいい。」でも「木を貼り合わせるので先端を尖らせるのは無理ではないか。」「一番前は衝撃を受けるところで強くないといけない。」「尖っていると弱いのではないか。」「では丸木舟は？ やっぱり、先端は平たくなっている。なぜなのか。」「よく見ると内側に舟をつなぐための取っ手（トウイシ）がついている。そのためではないだろうか。」「両方とも下に行くほど、「平たさ」が減ってきて、最後はほとんど「平たさ」は無くなっている。水を切ることへの配慮は最低限されているのではないか。サバニを巡る学びは、「やさしい日本語研修（博物館浴）」に続くこととなった。

4. やさしい日本語研修（博物館浴）

私は2023年9月7日、恩納博物館で博物館浴の一環として「やさしい日本語研修」を多くの博物館の仲間達と受講した。

博物館浴は九州産業大学緒方泉さんが提唱した考え方である。緒方さんは、博物館を見学し、前後に心理測定と血圧・脈拍を測る生理測定を実施し、その結果、怒り、混乱、うつといった精神状態を示す数値が多くの参加者で低下し、血圧が正常値に近づくという傾向が見られたと語る。博物館に求められる役割と機能中3番目の「はぐくむ」すなわち多世代の広がる幸せ空間としての博物館の有り様を提起する試みである。

恩納博物館のテーマは「やさしい日本語研修」であった。やさしい日本語とは、外国人（多くはアジアの人々）が博物館で対話する時に、日本語文化の障壁を低くし、彼らのストレスを低減しようという試みである。やさしいとは、EASY 簡単ということではなく、KIND 親切で、thoughtful 思慮深く というように私は受け止めた。

この研修会では、私はサバニグループに配置され、サバニとよく対話し、やさしい日本語で解説を書くことを求められた。まさしく構成的な学びの研修である。私たちのグループ（沖縄市博物館・刀禰 浩一さん、浦添美術館・幸喜明子さん、沖縄県立博物館美術館・私）は観察に基づき、疑問を言い合い、ゆんたくし、調べ、次のような知見を得た。

- 船は重心をなるべく下にくるよう作ります。丸木舟は特に下部を厚くし重心を下にし、転覆を防いでいます。
- サバニは板を貼り合わせたハギ船です。丸木が貴重となった時期 18世紀沖縄で登場しました。
- サバニの内糸溝ハギは基底部を厚い一枚板を使っています。南洋ハギは基底部の前と中、後ろに竜骨(カーラ)という厚い板を使用しています。
- ちなみにマーランという沖縄のジャンク型の船は基底部にカーラ(竜骨)を使用しています。
- また サバニは板の継ぎ目にフンドウと竹釘を使用しクサビを打ち込み水漏れを防ぐ工夫をしています。またサメの血や火で燻すことによって木の腐食を防いでいます。

そして、サバニを説明する時、一番大切と思われる点に重点をかけて、やさしい日本語を意識した解説文は「写真7」のようになった。

サバニを観察して形をみて「これは何」と疑問に思い興味をいだくクサビとしてのフンドウの役割、

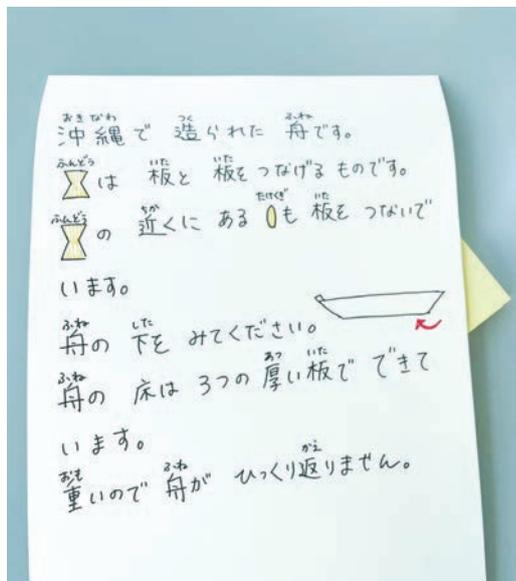


写真7 (サバニ 優しい日本語)

そして同じクサビの役割なのに見過ごされてしまう竹釘を意識した。ここにサバニの個性があると考えたからである。舟が舟として成立するための基本的要件、転覆しない構造、すなわち重心を低くすることに注目し、その秘密は下部の厚さにあることを示した。この二点にしぼって、「やさしい日本語」、日本語特有の抽象的な表現ではなく、具体的で、絵にも表して²⁵、私たちは説明した。

意味あることを成し遂げるために学ぶ、この場合は、サバニを「やさしい日本語」で語るために、他者とともに学ぶという営みである。学ぶ中で、他者との距離が次第に近づくことを感じ、成し遂げた作品に対する思い入れを共有でき、幸せを感じた。研修そのものに「博物館浴」機能が付されているという思いをもった。

学習観の転換を進めることが、学校・博物館のみ

ならず、社会に様々な豊かさを生み出すのではないかと期待している。



写真8 サバニの竹釘

謝辞

沖縄県小学校社会科研究会会長、金城和也仲井真小学校校長をはじめとする会員みなさまに、『へんだな』探しをするチャンスをいただいたことに感謝申し上げます。

²⁵ 幸喜明子さん作。

